

2015(平成27)年度 獨協中学校<第1回>入学試験問題 2015・2・1

〔国 語〕

○ 実 施 時 間 【8 : 3 0 ~ 9 : 2 0】(50分)

○ 次の注意をよく読んでおくこと。

- (1) 「始め」の合図があるまで問題用紙を開かないこと。
- (2) 問題は 一 ~ 四、15ページまであります。
- (3) 答えはすべて指定された用紙の解答らんにはっきりと、ていねいに書きなさい。
- (4) 答えを直すときは、きれいに消してから書きなさい。
- (5) 内容に関する質問は受け付けません。
- (6) 気分が悪くなったり、トイレに行きたくなったら、手をあげて監督^{かんとく}の先生に合図しなさい。
- (7) 「終わり」の合図があったら、直ちに筆記用具を置き、解答用紙が回収されるまで待っていなさい。
- (8) 解答上の注意
 - ・ 字数指定のあるものは、句読点〔。、〕および「」や（ ）なども一字と数えること。
 - ・ 文末表現は、「こと」、「から」など、問いにふさわしい形にし、文の終わりには句点〔。〕をつけなさい。

受験 番号		氏 名	
----------	--	--------	--

一 次の——のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① 真っ赤にソまる夕空。
- ② サンミヤクを越える。
- ③ サイサンがとれない事業。
- ④ カブシキ会社に勤める。
- ⑤ 彼は舌がコえている。
- ⑥ 偉大なコウセキをあげる。
- ⑦ ハコをならべる。

二 次の□には共通の言葉が入ります。それぞれ漢字一字で答えなさい。

- ⑧ □外で活動する。
日本家□の特徴を調べる。
軒を貸して母□を乗っ取られる。
本音と□前を分ける。
- ⑨ □設的な意見を言う。
くずれた家を再□する。
森林□に行く。
- ⑩ 日の光を□びる。
冷や水を□びせる。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

お父さんの仕事の関係で、真人と両親はオーストラリアに引っ越してきた。しかし、お母さんは日本に帰国することとなった。

空港に着いて、お母さんがチェックインを済ませるとお父さんがコーヒーでも飲もう、って飛行機の見えるカフェに入った。ケンカしてないのに、お父さんとお母さんはケンカしているみたいだに黙りこくったままだった。ぼくはコーラを飲みながらその場で思いついたこと、つまりこの夏の計画をペラペラとひとりで喋った。コーラは砂糖がすごいっていつもお母さんは文句を言うのに、お母さんはだまっている。ワトソンの夏期講習にジェイクと通う。ケルヴィンの家に泊まりに行く。ノアのポニーにまた乗せてもらう。サッカーの合宿。メイソンとリアムにも久しぶりに会える。

② 「お友だち、たくさんいるんだ、真人」

お母さんがコーヒーカップを受け皿に置いた。うん、ってぼくは答える。もう、お母さんよりお友だちのほうがいい歳よね、ってふつと笑う。ぼくをみながら目を細めた。目尻に細かい皺がいっぱい寄った。もう、十三歳なんだぞ、こんど七月が来たら十四だ、ってお父さん。

「そうよね、ほんとうに、そんなよね。こっちでは、急いで大人にならなくっちゃいけないみたいね」

お母さんは、夕方にはもう東京、地球は狭いわね、って立ち上がった。

天井から床まである銀色の自動ドアのまえでぼくらは立ち止まる。ドアの両脇にはフライトの目的地や出発地、出発時刻や到着時刻の表示された電光板が並んでいる。そこにいる人たちはだれもかれも、ステージの上の登場人物みたいだった。自分と相手とこの場所だけに全神経を集中させている。お客さんはいない。息子らしい男の人を笑顔で見送った女の人が、ドアが閉まってから、涙をぼろぼろこぼしはじめた。だんなさんらしい男の人に背中を優しくさすられながら、退場。大家族がドアをくぐる。た

ったひとり残された若い女の人は、ドアが閉まってからも手を振るのをやめない。東京成田行きの便名が電光掲示板の一番下にあった。お母さんがくりりと振り返った。

「じゃ、まあくん。お父さんとふたりでしつかりね。新しい学校も、がんばってね」

うん、ってぼくはなるべくふつうに答える。

「あなた。真人のこと、よろしくお願いします」

お母さんはお父さんに頭を下げた。お父さんも、つかさのこと、三鷹^{みたか}の家のこと、よろしく頼む^{たの}、って頭を下げる。

「まあくん。冷蔵庫に、グラタンのもとを作っておいたから、オーブンで焼いて食べてね。冷凍室^{れいとうしつ}にも、レンジでチンするだけで食べられるものがたくさん作ってあるから。牛乳は腐^{くさ}らないうちに飲んでね。あなた、洗濯機^{せんたくき}の調子が悪いの、知ってた？ どうせ帰るって思って、中古を買ったのがいけなかったのよね、この際、新しく買い換えてもいいんじゃない？ 節水レベルが厳しいから、値段が高くて節水タイプのドラム式。サッカーのユニフォームも洗わなくっちゃいけないでしょ。すごい汚^{きた}し方するんだもの、まあくんは」

最後まで、いろいろ細かいなって思ったけど、うるさいとは思わなかった。それどころか、このお小言をもう少し聞いていたかった。なんでぼくらは、バラバラに分かれて暮らすことになったんだろう？ みんなやりたいことをしようとしたら、こうするしかないのはわかってるんだけど。お父さんはこっちにいたい。お母さんは東京に戻^{もど}りたい。お姉ちゃんは最初から高校は東京って決めてたし、ぼくはいまはこっちにいたい。

「あなた」

お母さんがうつむく。片腕^{かたうで}に提^Aげていたダウンジャケットが床にふわりと落ちた。私、これでよかったのかしら？ あなたに言われたみたいに、なにも1してこなかったんじゃないのかしら？ この国の気に入らないところばかり気になって、文句ばかり言って。昨日だって、こっちの人、みんなあんなに優しい人たちなのに、私、うまくお礼も言えなかった。

「過ぎたことをどうの言っても、仕方ないさ」

お父さんが床に落ちたダウンジャケットを拾って、お母さんの肩にかける。

「でも、2すればなんとかなったと思うの」

「努力^{がまん}と我慢^{ちが}は違う。きみの場合は、3になると思う。もう、きみが4するのは見たくない」

お母さんの目に涙が浮^うかんで、まあくん、まあくん、とぼくを呼んだ。

「やっぱり、お母さん、この国が嫌い。この国にあなたを取られた」

ぼくはだまってお母さんを見下ろす。ぼくは生まれて初めて、お母さんが可哀^{かわい}そうだと思った。ぼくのせいでこんなことになったのに、それができなくて、この国のせいになっている。

「まあくん、やっぱり、お母さんと日本に帰ろう。お母さん、今までみたいにガミガミ言わない。サッカーもすればいい。行きたい学校にも行けばいい。もう大きいんだし、みんな、あなたが決めればいい。だから、ね、ね」

お母さんは目も鼻も真っ赤にしている。お母さんのためだったら、スシってどなられたっていい、補習校に通ってもいい、漢字のテストだってやったっていい、サッカーだってあきらめたっていい、通訳もやってあげる、でも、これだけは、どうしてもだめなんだ。

「やっぱりお母さん、日本人なの。日本でしか生きていけないの。ごめんね、まあくん」

お母さんはダウンジャケットの襟元^{えりもと}を片手でつかむと、背中をむけてドアに向かった。

「遼子^{りょうこ}」

お父さんの声にお母さんが振り返る。その場で金縛り^{かなしばり}にあったみたいにお母さんはじっと立ち止まった。そんなかなしい目、もうしないですよ。お母さん、おねがい。ぼくは、ぎゅっと目を閉じた。

すると、とつぜん、ぼくの耳元で聞き覚えのある音が聞こえてきた。しやらしやらとピンの雨が降る音。まぶたの裏で、生き返った蝶^{ちゅう}たちが虹色の帯となって飛び立つ。おそろおそろ目を開けると、銀色のドアのすきまから、赤いジャケットの羽がふわりとひるがえるのが見えた。その赤色はぼくの目を焼いて、あたり一面紅葉が散った。聞こえる。命がけでさようならを叫^よぶ声。ぼく

は、しばらく耳をふさいでいなければならなかった。冷たい金属のドアが閉まって、天上から白金の幕が容赦なく流れ落ちた。

「真人」

⑥ 劇が終わる。ステージのないところでは、魔法になんてだれもかからない。子供の役割を終えたぼくがいるだけ。

「帰ろうか」

お父さんがぼくの肩を抱いて、ぼくらは歩き始めた。

* 原文を一部改めました。

(岩城けい『Masato』より)

問1 ①とありますが、「いつも」という言葉はどの語にかかっていますか。最もふさわしいものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア イ ウ エ オ

いつも／お母さんは／文句を／言うのに、／お母さんは／だまっている。

問2 ②とありますが、この時のお母さんの心情の説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 多くの友人と仲良く過ごしていけそうな真人に安心しながらも、早く東京に帰りたいと思っている。
- イ 多くの友人に囲まれている真人に安心感を覚えながらも、今後の友人関係のトラブルを心配している。
- ウ 真人がたくさんの友達をつくることができるようになるまでの苦労を思い出し、気持ちが落ち込んでいる。
- エ 真人が多くの友達に恵まれていることをうれしく思う一方で、子が自立していく様子を感ぜつついる。
- オ 親子の別れが近づいているにもかかわらず、友人の話ばかりする真人に対して少しいらだっている。

問3 ③とありますが、空港にいる人たちが「登場人物」と表現されているのはなぜですか。四十字以内で答えなさい。

問4 ④とありますが、その理由として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア お母さんの気が済むまで小言を言わせてあげれば、最高の親孝行になるはずだと確信したから。
- イ お母さんと離ればなれになってしまうと、もう小言を聞く機会もなくなってしまうと思ったから。
- ウ お母さんの小言は、どれも今後のオーストラリアでの生活に役立ちそうなことばかりだったから。
- エ お母さんの小言を黙って聞けば、今までお母さんに迷惑をかけてきたことが帳消しになると考えたから。
- オ お母さんの注意をしつかり聞けば、お父さんの料理や洗濯の腕が上がるはずだと思ったから。

問5 A・Bの「ダウンジャケット」には、お母さんの心情が反映されていると考えられます。その心情として最もふさわしいものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 慰め	イ 怒り	ウ あわれみ	エ 決心
オ 希望	カ 後悔	キ いらだち	ク 焦り

問 6

1～4に入る言葉の組み合わせとして最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 1 努力——2 我慢——3 我慢——4 努力
 イ 1 我慢——2 我慢——3 努力——4 努力
 ウ 1 努力——2 努力——3 我慢——4 我慢
 エ 1 我慢——2 努力——3 努力——4 我慢
 オ 1 努力——2 努力——3 努力——4 我慢

問 7

⑤「それ」とは何ですか。四十字以内で答えなさい。

問 8

⑥「劇が終わる」とありますが、真人にとっての「劇」が終わったことを示している一文を文中から探し、初めの三字を答えなさい。

問 9

次のア～オのうち、本文中で用いられている表現の特徴として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 後半部では登場人物の会話をかみ合わないようにして、親子間の心の距離を演出している。

イ 全体を通じて会話を連続させ、日本とオーストラリアの間で揺れる母の心情を表現している。

ウ 前半部で擬人法を多く用いたことで、登場人物の性格がはっきりと書き分けられている。

エ 真人と母が別れをむかえる場面では、たくさん色が効果的に用いられている。

オ 会話文以外の部分から心情表現を完全に取り除き、軽やかなリズムを生みだしている。

四

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「膝ってどこ？」と尋ねると「ここに決まっているだろう」と膝頭を指します。「じゃあ、肩は」というと「何いつてるの、ここでしょ」と肩峰を指す。現代人にとっては、これが当たり前の感覚です。

しかし「子どもを膝に乗せる」というときに、膝頭に子どもを乗せる人はいないし、「肩が凝る」というときに肩峰が凝るという人もやはりいない。

日本人にとっての「膝」とは、膝頭から腿の付け根、太ももの前側全体をいったし、「肩」とは肩峰から首の辺りまでを全部ひっくるめて肩といました。

A 日本人にとっての身体は、膝頭や肩峰のようなポイントではなく、膝のあたり、肩のあたりという「界限」だったのです。

解剖学的な膝頭や肩峰という「ポイントとしての身体」に対し、「界限」に代表される「おおざっぱさ」が日本人の身体言語の基本です。

「おおざっぱ」なのは身体の部位の話だけではありません。

子どもの頃はうちには体温計というものがありませんでした。朝、学校に行く前に「熱があるみたい」というと、母や祖母がおでこをさわり、「ああ、このくらいなら大丈夫」と――を叩かれ学校に追われました。怪我をして血が出て「このくらいつばをつけておけば平気」と、いい加減な手当てをされたし、海でおぼれそうになって（小さな漁村で育ったので）やつのことで浜辺まで泳ぎ着きゲーゲー吐いたときだって「少し寝てれば治る」と砂浜に放置されました。

X

これが少し前の日本人でした。

現代の身体に対する志向はこの逆に向かっています。

膝が膝頭に、肩が肩峰になるというポイント化だけでなく、病名や怪我の名も細分化されていく。むかしは（少なくとも一般人

にとつては) 風邪とインフルエンザの違いはなく、ただの下痢と過敏性腸症候群との違いもなかった。

B 細分化にはいいこともあります。いいことがあるどころか、たくさんあります。しかし、細分化と医学の進歩は、安易なネーミングとそのネーミングに引きずられる盲信という危うさもはらみます。

数年前に「肉離れ」というものを体験しました。寒い舞台の上に九十分ほど座っていて突然走り出したら、右ふくらはぎの上部でプチッと音がして激痛が走ったのです。ふくらはぎが痛くて歩けない。整形外科と整復院の診断はともに「肉離れ」。全治四週間などという。知人の外科医に電話で聞いても同じような答えでした。

C、二日後には舞台があります。四週間も待てません。

そこで、まずは「肉離れ」という診断名を無視することに決め、自分のからだに聞いてみた。詳しいことは省略しますが、まず塗り薬と飲み薬は使わないことにし、先生方からいわれたことも一応忘れることにしました。そして、自分のからだに尋ねつついろいろやって、結局は二日後の舞台を無事に勤めることができました。

整形外科と整復院の先生は私のふくらはぎの状況をみて「肉離れ」と診断しました。彼らの頭の中で、チェックリストがひとつひとつチェックされているさまが想像されます。それによってもっとも「正しい」と思われるネーミングをした。するとそれから先は私の足を見ることがよりも「肉離れ」というネーミングに引きずられ、その結果を盲信し、「肉離れ」に対する治療だけが始められます。

いま目の前にある「その人の足」という個別の状況が忘れられてしまうのです。

Y

これはお医者さんだけではありません。自分自身もそうです。自分の身体を他人に任せて、言いなりになってしまします。

そして、こういうことに何の疑問も抱かないし、むしろそれが当然だというのが現代の人の感覚です。

しかし、これは日本人にとつてはかなり新しい感覚なのです。

古い日本語の「からだ」というのは死体という意味でした。生きている身体は「み(身)」と呼ばれ、それは心と魂と一体のも

のでした。やがて、生きている身体が「からだ」と呼ばれるようになったことで、からだは自分自身から離れて対象化されるようになります。そうすると、自分自身との一体感が薄れるので、専門家である他人の手に委ねても平気なようになるのです。

それだけではありません。「からだ」の語源である「殻」のように、自分の周囲に強固な境界を設け、他人との壁を設けるようになります。

このような壁が強いと、能をはじめとする古典芸能のほとんどは演じることができません。古典芸能は、楽譜も曖昧なものだし、指揮者もない。お互いの呼吸で合わせていきます。しかも、その場その場で。

ある能楽師が、若いころ生活が苦しいので企業に勤めたそうなのです。ところが毎日乗る満員電車。目の前に女の子の顔がある。化粧の匂いもある。それで何にも感じなくするために、周囲を感じるという感覚をシャットアウトしなければなりません。他人がいても、いないがとき精神状態が求められるのが満員電車での通勤です。

しかし、そんな生活を続けていたある日、舞台上で相手の呼吸や雰囲気を感じられなくなっていたことに気づいたようなのです。③ それでは古典芸能はやっていけません。そこで彼は生活の苦しさを諦めて、会社を辞めることにしたそうなのです。

他人との境界が曖昧であれば、人の苦しみは我が苦しみであり、人の喜びは我が喜びとなります。

また、他人とだけでなく、自然との境界線も曖昧になるので、自然とも共鳴ができます。④ 『おくのほそ道』の本で、日光の杉並木から漏れてくる日の光に感動し、人生が変わったという人の話を書きました。私たちの周りには、私たちの生きかたすらも変えてしまうほどの自然や、そして人がたくさん存在しています。

現代は、それらに対して、あるいは目をつぶり、あるいは拒否し、いよいよ「孤」の道を歩んでいるように感じます。⑤ これはとてももったいないことだと思うのです。

* 原文を一部改めました。

(安田登『日本人の身体』より)

- 注1 ポイント……点。
- 注2 過敏性腸症候群……ストレスなどで腸管の機能に異常を起こす病気。
- 注3 ネーミング……名づけること。ここではとくに病名をつけること。
- 注4 盲信……わけもわからずに信じこむこと。
- 注5 整復院……整復師（国家資格）が治療を行う、運動器官専門の治療院。
- 注6 対象化……わたしの心や精神から切り離されて一つのものとして存在するようになること、またそのようにあつかわれるようになること。
- 注7 能楽師……能を演ずる役者。

問1 ☐ A～Cに入る言葉の組み合わせとして最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア A すなわち B むろん C しかし
- イ A すなわち B むろん C むしろ
- ウ A むしろ B むろん C やがて
- エ A むしろ B しかし C やがて
- オ A すなわち B しかし C むしろ

問2 ——①は「ある行動にかりたてるため、強く働きかける」という意味の慣用句です。【☐に入る言葉を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 手 イ 頭 ウ 尻しり エ 肩 オ 膝

問3 ☐ X・Yに入れるのに適当な表現を次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

☐ X

- ア あまり難しいことは考えない
- イ あまり細かいことは気にしない
- ウ あまり先のことは気にしない
- エ あまり大きなことは考えない
- オ あまりからだのことは気にしない

☐ Y

- ア 個別的状況を見捨てる
- イ 安易にネーミングする
- ウ からだの治療を優先する
- エ 自分のからだに尋ねる
- オ からだを細分化してみる

問4 ——②の指す内容を五十字以内で答えなさい。

問5 — ③の理由として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 古典芸能は、演じ手と観客が互いの雰囲気を読み合い、両者が一体となって作られるべきものだから。
- イ 古典芸能は、演じる者全員が周囲を感じる感覚をときすませ、自分を忘れ去って演じるべきものだから。
- ウ 古典芸能は、演じ手が、他人がいてもいないかのような精神状態で演じなければならぬものだから。
- エ 古典芸能は、演じ手の生活の苦しさから出る味わいが出て、初めて作品に深み^{あた}が与えられるものだから。
- オ 古典芸能は、演じる者同士が場に応じて、互いの呼吸で合わせながら演じなければならないものだから。

問6 — ④は、筆者が以前執筆した著書『本当はこんなに面白い「おくのほそ道」』のことを指すものと思われます。『おくのほ

そ道』に見られる句「閑かさや岩にしみいる蟬^{せみ}の声」と同じ季節の季語を含む俳句を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 柿食^{かき}へば鐘^{かね}が鳴るなり法隆寺
- イ 旅に病^やんで夢は枯野^{かれの}を駆けめぐる
- ウ 目には青葉山ほととぎす初鯉^{はつがつお}
- エ 菜の花や月は東に日は西に

問7 — ⑤とありますが、そのように筆者が考える理由を六十字以内で答えなさい。

問8 本文中での筆者の指摘^{しってき}に合うものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 身体が「からだ」と呼ばれるようになったことで、はじめて身体は自分でコントロールできるものになった。
- イ 能をはじめとする古典芸能を演ずる役者は、他人との境界線を曖昧にしようとして「孤」の道を歩んでいる。
- ウ 身体の詳細化が進んでいくなかで、私たちにとって身体は、次第に自分自身との一体感を失うことになった。
- エ 医師は病名を付け、それを治すことが治療だと思っているが、もつと患者^{かんじや}の身体全体をよくみる必要がある。
- オ 私たちは身体の詳細化がもたらした悪い影響にも目を向けて、現代の行きすぎた細分化を改める必要がある。

⑤	①
⑥	②
⑦	③
	④

[illegible]

三
問 1
問 2

問
3

問 4

--

問 5

A
B

問 6

--

[illegible]

問 8

四

問 1

問 2

問 3

X
Y

[illegible]

問 5

問 6

問
7

問
8

[illegible]

受験番号	
氏 名	